

幕末期前後、欧米人の日本研究 ：本学図書館所蔵貴重書から 日欧文化交渉史の一側面を探る

吉 田 隆

はじめに

森田安一編『日本とスイスの交流 幕末から明治へ』(山川出版社2005年)は、1864年(文久三)に締結された日本スイス修好条約140周年を記念して2004年10月19日に日本女子大学文学研究科が主催しておこなったシンポジウム「幕末明治の日瑞交流をめぐって」の報告書がもとになっている。

スイスの宗教改革ほか歴史文化に深く関わってきた森田安一「幕末明治期の日本・スイスの交流をめぐって」を巻頭に、イェルク・フィッシュ「帝国主義と平等性のあいだ」、中井晶夫「日本・スイス交流の誕生過程」、田中彰「岩倉使節団の見たスイス」、フィリップ・ダレス「ホルナー、アンベール、そしてその後」、踊共二「スイス絹商人ハンス・シュペリの見た明治の日本」、小谷年司「スイスと国交の始まった頃の時計産業」ほか各々専門領域は異なるが内容豊かな論稿の構成である。

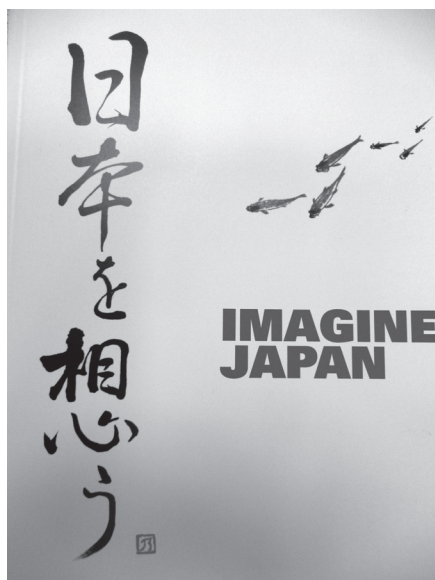
＜観光立国＞として映るスイスだが、幕末期、1853・54年の2度に渡ったペリー提督指揮下のアメリカ合衆国日本遠征東インド艦隊(所謂、黒船)の来航、その＜外圧＞に挑んだのが国際情勢を認識していた幕閣である(加藤雄三著『黒船異変』岩波書店、1993年159頁以下。184頁)。

彼ら幕閣の優れた交渉力(1800年前後の国際法と国際関係、その従属のうえに築かれる平等のシステム)によって日本の＜開国＞は行われた。

それを契機に日本が八番目に修好通商条約を結んだ国がスイスであることは、従来、小中高のテキストで触れられることが少なかった。

18世紀末にフランスのリヨンに近いアノネイに住んでいたJ・ミィシエルとエチエンヌのモンゴルフィ兄弟は1783年6月5日に熱気球を飛ばしたこと、1805年1月17日に長崎の空でも日本滞在中のドイツ系医者で博物学者のラングスドルフが日本最初、和紙製の熱気球を飛ばした事実もそうである。

スイス全権公使エメ・アンベールが1863年4月の来日から約10ヶ月間の滞在中に日本の印刷物やF・ベアトの写真類を収集し、後にそれらを自著『幕末日本図絵』（1870年）の挿絵に用いて日本をヨーロッパに紹介したことや、最近整理されたアンベールの日本関係資料（エメ・アンベールコレクション）は、一昨年スイスのフランス語圏ヌシャテルのMusée d' ethnographieで日本・スイス国交150周年を記念して『日本を想うImagine Japan』展（2014年6月20日～2015年4月19日）が開催されたことで明らかになったが、今後の新たな公開にも興味と関心が尽きない。



『日本を想う』

また日本初の西洋式製糸機械製糸所（前橋製糸所）の創設にもスイス人グスタフ・ミューラーの指導があったこと。

横浜のスイス人絹商人シュペリが民俗学的に日本文化に関心をもち、特に竹の調査と竹製品の収集を行いながらも、「商い」を通じて「商人こそ自由な経済活動と民主政治の主役」であるとしたシュペリが、同じ職業に従事する日本人へく共感と温かい眼差しを>を持ったことなどの事例を幾つかあげるだけでも、幕末から明治維新以降の近代化に欧米諸国（お雇い外国人他）が貢献する過程で、スイスも今日に至るまで歴史的、文化的、政治的、経済的交流で日本と密接に関わってきたことを本書で知ることができる。

以下では、欧米人の日本研究・貴重書から日欧文化交渉史の一側面を探ってみよう。

神奈川大学図書館所蔵資料における貴重書について

洋書に限定すると、1799年以前に印刷されたもの。1800年以後に印刷されたもののうち、次の各項のいずれかに該当するもの。①伝本が少なく資料的価値があると認められるもの。②名家の書入れに等により特に資料的価値があると認められるもの。③図面のうち、資料的または芸術的価値があり稀覯本とみとめられるもの（貴重書の選定と選書の基準は各大学図書館、類縁機関によっていろいろだが）。

ここでいう貴重書の＜価値＞についてのべると、貴重書（古書）が商品としての＜価値＞を持っている訳でない。

貴重書（古書）の値段（価格）は、一種の狭義の＜社会的価値＞を持つことによって需要供給の形で＜商品＞に似せて＜交換＞され、二次的＜分配関係＞で、その評価額が決定されているのである。こうとらえざるを得ないのは、大学図書館では各書店から貴重書（古書）について情報を入手し、数十万。数百万、それ以上の値段（価格）の貴重書（古書）にどれほどの労働時間が費やされ、どのような素材がもちいられているのか、数百年経過するとほとんど各書店も図書館員も検証することができなくなっている。

それ故に資料購入に際して資料に対しての、＜評価＞・＜価値関係＞、そし

てどのようなく色彩>を与えるかという価値判断が求められる（一つの事例をあげるならば、1494年に出版されたインキュナブラ・初期刊本で、当時の算術、幾何学の本で『数学大全』ともいうルカ・パチョーリの『スムマ』がある。複式簿記についての論理的記述があることで有名であるが、世界で現存が99部、そのうち十数部を日本で所蔵している。今から20数年前に1千200万位だったが、今現在は8千万円を超えている）。

インキュナブラの価格については、Max Sander, Handbuch der Inkunabelpreise, Mailand:Ulrico Hoepli, 1930が詳しい。

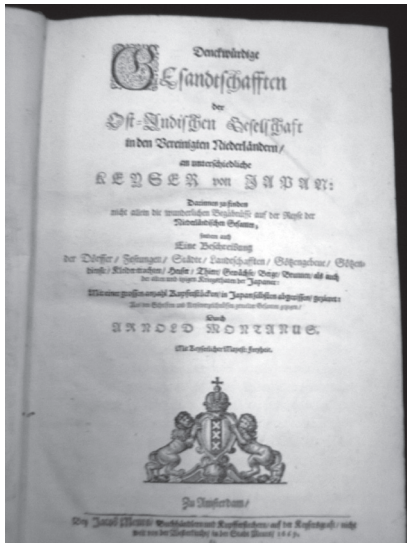
『オランダ東インド会社遣日使節紀行』について

Gedenkwaardige Gesantschappen der Oost-Indische Maatschapy aan de Kaisaren van Japan, Amsterdam, 1669.

金井圓の著書『江戸西洋事情』（新人物往来社1988年108頁以下）に拠ると、『オランダ東インド会社遣日使節紀行』のフルタイトル「連合ネーデルランドにある東インド会社の、日本の歴代皇帝のもとへの記憶すべき使節の数々。オランダ使節たちの旅行も途次に起こった奇妙な出来事や、村落、知性、都市、風光、寺社、宗教、衣装、建物、動物、植物、山岳、湧水、日本の人の昔と近年の戦争行為の記述を含む。日本で描かれた大量の肖像画を挿絵として、同じ使節たちの著述や旅行記から抽出している。アムステルダムにて、ムール町のウェステル市場向かい、カイザー運河沿いの、書籍販売業ならびに彫刻業者ヤコブ・ムールにより1669年刊行」とある。

当時のオランダは、1620年代にスペインと戦争、1648年、スペインがオランダの独立を承認したミュンスター条約・ウェストファリア条約を経て改革派（カルヴァン派）オランダ共和国が成立した時代、後にフランスのルイ14世が突然スペイン領のフランドルに侵攻するなど、国際政治が混沌していた時代であった。

また。金井によれば「オランダ語初版は1669年に二度、1670年、1680年の四度」刷られたという。このオランダ語訳2冊を筆者は手にしたことがあるが、特権条項のあるものとないものを指していると思われる。

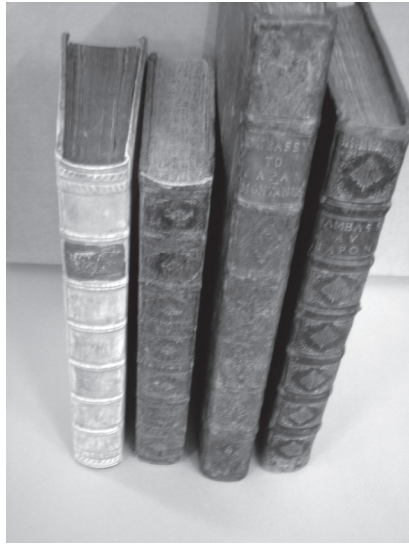


オランダ語初版タイトルページ



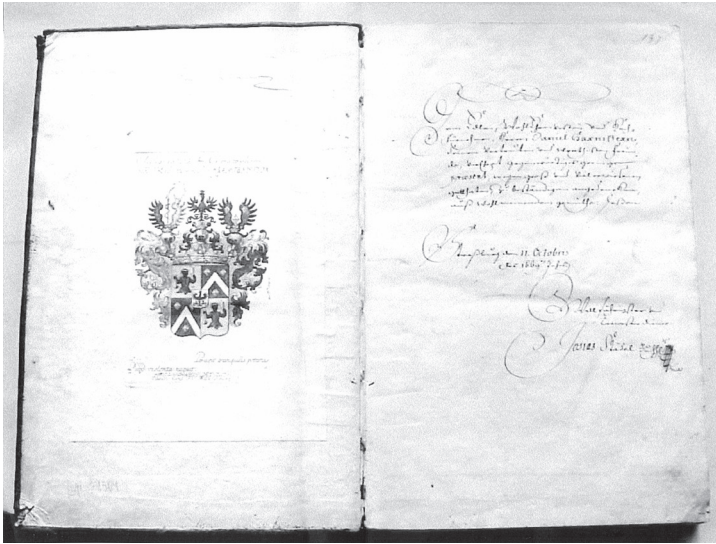
「特権条項」

オランダ語初版が出版された同年には、ドイツ語訳初版がアムステルダムで、1670年にはロンドンで英語訳初版、1680年にはフランス語訳初版がアムステルダムで出版されている。神奈川大学図書館には、これらの初版本をすべて所蔵している。



右からオランダ語初版ドイツ語・英語・フランス語訳初版

特に本学所蔵のドイツ語訳初版の見返しには蔵書票Ex Librisと手書きの献辞があることから、本学所蔵のそれは首都ラスブルクの印刷家兼出版者・書籍販売業者であったシュテーデル（Josias Städel, 1648-1767）からオーストリアのヨハン・クリストフ・バルテンシュタイン男爵（Freiherr von Johann Christoph Bartenstein, 1689-1767）に贈呈されたことが分かる。



蔵書票

またEx Librisによればバルテンシュタイン男爵加盟家名の蔵書の一冊であったことを窺い知ることができる。バルテンシュタインは、オーストリア皇帝カルル六世の治世下では例外的に市民出身の重臣であった。

皇帝の死後、女帝マリア・テレジアからも信頼され、オーストリアの政治改革。外交政策に貢献して歴史にその名を刻印した政治家であることから、本書の資料的価値に何らかの重みを添える（神奈川大学図書館での「貴重書の選定基準」を参照）。

このように各国語訳版が相次いで出版されたのは、江戸幕府による鎖国令が1639年に貫徹された以降、60年近くの間、日本についての情報が入らなくなったために「日本についての最も重要な情報源」(マーティ・フォーラー、フォーラー・くに子訳「われらの出島—オランダ人による歴史的考察」神奈川大学工学部建築学科建築史研究室編『出島オランダ商館復元をめざして』史跡「出島和蘭商館跡」建造物復元検討委員会、1999年46頁)として本書がオランダのみならずヨーロッパの日本に関心がある人々に歓迎されたからである。

モンタヌスの生涯について

モンタヌスの生涯については、Reinier H. Hesselinkの「カルヴァン主義思想家、アルノルドゥスモンターヌスとその業績」（有坂隆道編『日本洋学史の研究X』創元社1991年1-23頁）やMemorable Embassies*the secret history of Arnordus Montanus'Gedenkwaardige Gesantschappen in Quaerendo, 32/1-2(2002), pp.99-123によれば、

モンタヌス（Arnolus Montanus, 1625-1683）は、アルノルルド・デン・ベルフ(Arnold van den Berg)もしくはファン・ベルヘンとも云い、南オランダからの移民の家に生まれた。母のAnna Arents Coopは船長の娘、父はIronhandというあだ名の船乗りで後に書籍出版に従事したがはかばかしくなく製本屋と本屋で生計を立てた。二人の結婚は1623年、息子モンタヌスは1625年9月23日に洗礼を受けているが、彼が1575年創立のライデン大学に入るまでの青年時代の足取りは明らかにされていない。

ライデン大学でモンタヌスは、改革派教会（正統派カルヴァン主義者）の神学者ヤーコービュス・トリグラント（Jacobus Trigland, 1583-1654）の下で神学を学び、さらに哲学の勉強へと転じた。

1653年、モンタヌスは、アムステルダムから数キロメートル北のスヘリングウォウデSchellingwoudeのオランダ・カルヴァン派教会の牧師、1657年にはホラント州スホーンホーフェン Schoonhovenのラテン語学校の校長を勤めた。

1663年、彼はアムステルダム出身のJudith Egbers Veermanとスホーンホーフェンで結婚する。ジュディは6人の子供をのこし他界。その二年後モンタヌスはカルヴァン主義のもう一つの本拠地で16世紀以前はハンザ同盟の港町カンペン出身のEmmigie Jans と再婚し4人の子供をもうける。

1683年、モンタヌスは58歳で亡くなるが、彼の著作活動は、① School text（学校の教科書に関するもの）②Dutch history（オランダ史に関するもの）③ Calvinist propaganda（カルヴァン主義の宣伝・鼓舞に）④ World geography（世界地理学に関するもの）の四つのカテゴリーに分けられる。本

書は World geographyの著作のひとつに位置づけられる。

モンタヌス『日本誌』

モンタヌスの本書は、日本で和田万吉により『モンタヌス日本誌』（丙午出版社 1925年）としてジョン・オギルビー（1600-1676）の英語訳から翻訳された。

本書の主なる内容は、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康による国内統一、バカ反体制したでの秀忠、家光の支配とキリシタン弾圧」などについての歴史的記述（記録）である。

ここで信長を事例にすると、歴史教科書では「本能寺の変」は、1582年（天正10）6月21日、モンタヌスの本書では同年20日、明智光秀に不意を突かれ攻撃を受けた信長はしばし攻撃を試みるが逃げ、都の近く、森の中で敵によって殺害されたと記述されている。ここには本能寺の記述がない（和田訳 111頁）。

またモンタヌスの価値関心からも、宣教師を含む日本でのキリスト教徒への弾圧については詳細に記述している（和田訳 264頁以下）。

モンタヌスは一度も日本に来ていない。

モンタヌスの記述は、彼とムールスが購入した17世紀初葉から50年間、日本に派遣されたオランダ東インド会社のオランダ人使節数名の見聞記、16世紀以来の日本でのキリスト教の布教・伝播に従事したポルトガル人、スペイン人のイエズス会宣教師の報告に依拠している。

それゆえザヴィエル（Francisco de Xavier, 1506-1570）、ヤジロウ（日本最初のキリシタン）、トルレス（Cosme de Torres, 1506-1570）、ヴァリヤーノ（Alexxandro Valignano, 1539-1606）、カロン（Francois Caron, 1600-1673）らの名を本書に認める。

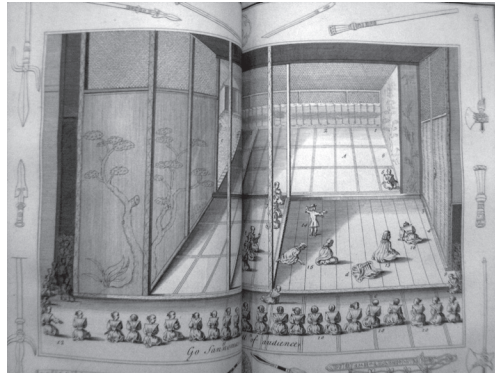
ドイツの博物学者で医学者のエンゲルベルト・ケンペル（Engelbert Kaempfer 1651-1714）もモンタヌスの本書から日本の情報を得た一人である。1690年にオランダ東インド会社の医官として来日したケンペルは、1692年までの日本滞在の間、2度の江戸参府に随行している。

オランダ人の江戸参府は、1609年(慶長14)に始まるが、長崎通商免許の御礼を目的として将軍に拝謁し、舶来の珍物、貴重品を方物として献じていたオランダ商館による江戸参府の定例化は1633(寛永10年)で、1850年(寛永3年)まで116回実施された。

参府の際、オランダ商館の一行には商館長に書紀、医師そして助手等が随行したから、ケンペルも日本橋本石町にあった宿泊先の長崎屋で当時の蘭学者たちと学問的交流と親睦を深めた。

ケンペルが書き記した当時の日本についての原稿や資料は、彼の死後、スイス人ジョン・G・ショイツェル (John Gaspar Scheuchzer 1702-1729) によって校正され『日本誌』The History of Japan .1727. 2vols.として英訳され、後にドイツでもクリスティアーン・ヴィルヘルム・ドームの編集によるGeschichte und Beschreibung von Japan, 1777-1779が出版された。そこには、ケンペルの2度にわたる江戸参府で得た知識、彼の直接の見聞に依拠した日本の歴史、地理、政治、貿易、宗教、文学、芸術、言語、博物について考察がされている。

江戸参府で五代将軍綱吉との拝謁にふれている箇所では「謁見の広間は、モントヌスが想像し紹介していたのとはずっと違っていた。ここには高くなった玉座も、そこに登ってゆく階段も、たれ下がっているゴブランの壁掛けもなく、玉座と広間すなわちその建物にもちいてあるという立派な円柱もない」(ケンペル著・斎藤信訳『江戸参府旅行日記』平凡社 1977年、191頁)とケンペルが述べている。



ケンペルの『日本誌』 フランス語訳の謁見の間

モンタヌスの本書と共にケンペルの『日本誌』は、その後ディドロ、ダランベールの『百科全書』 Encyclopédie… 1751-1780. 35v. の1765年第8巻453頁の日本Japon、455頁のディドロの日本人（の哲学）などの記述に影響を与えた。先学の研究に学ぶならば、『百科全書』のなかに日本関係の諸項目を拾い出し、最初にそれらを分類して総索引を作成したのは、バーゼルのフランス教会牧師のピエール・ムーション（Pierre Mouchon 1733-1797）である。

ムーションは、「日本人の哲学」1項目、「日本」総記1項目、「日本」の地理11項目、「日本の政府」7項目、「日本の宗教・聖職者」27項目、日本の「風俗・習慣」4項目、日本の「技術・学問」10項目、総計61項目を8年かけて整理している（中川久定「一八世紀フランス『百科全書』の日本観察(上)(下)」『思想』1975.No.608, 67-93頁、No.609, 409-434頁）。

モンタヌスの銅版画

ところで、『本書』には、見事な銅版画二十数枚の挿図（フォリオ）が「足継ぎ製本」で折り込まれている。オランダ語初版25枚、ドイツ語訳初版24枚、英語訳初版25枚、フランス語訳初版26枚であるが、それらの中でも『出島図』はヨーロッパ人の描いたものでは一番古いと従来云われてきた。

表1 モンタヌス『オランダ東インド会社遣日使節紀行』挿図類対照表

オランダ語初版1669年				英語訳1670年			
	頁	No.	頁				
Reis-kaart	Fol. 1	[1]	Fol. 1	De Land Reyse van Osacca tot Iedo		大阪江戸間陸路:長崎大阪間海路	
Stad Batavia	30 31	[2]	38 33[39]	Casteels ende Stadt Batavia		城塞都市バタビア	
Logie voor Nangesaque	52 53	[3]	72 73	The Lodge before Nagesaque or the Iland Schisma		長崎または出島まへの詰所	
Osacca	68 69	[4]	88 89	The City Osacco		大阪	
Moord van den Kaisar Cubo 公家の殺害	78 79	[5]	98 99	Miako		都	
De stad Miaco 都	78 79	[6]	100 101	The Murdening of the Emperor		公家の殺害	
Jedo	110 111	[7]	134 135	Iedo		江戸	
Tempel met duizend beelden	116 117	[8]	138 139	Tempel with a thousand Imajes		千佛殿	
Kaisar hof tot Jedo	122 123	[9]	146 147	The Emperors Court at Jedo		江戸城内	
Hof des Dairoos tot Miaco	138 139	[10]	162 163	The Dayro's Court in Miaco		内裡	
Ziende water van Singok	240 241	[11]	262 263	The boyling water of Singock		地獄の沸湯	
Tempel van Dayboth	248 249	[12]	274 275	Dayboth Temple		大佛殿	
Kasteel van Osacca	272 273	[13]	300 301	The Castle of Osacca		大阪城	
Tempel buiten Saccay	274 275	[14]	302 303	The Great Temple without Saccay		堺郊外の大殿堂	
Aerdbeeving tot Jedo	352 353	[15]	382 383	Earthquake at Jedo		江戸の大地震	
Des Kaisars Throon	356 357	[16]	384 385	The Emperors Throne		皇帝の王座	
Begraaf-plaatzen	360 361	[17]	388 389	Japan tooms or burring places		日本の霊廟または火葬場	
Ceremonie van haar trouwen	374 375	[18]	404 405	Ceremonie of theyr Merrige		婚礼の儀式	
Brand vans Jedo	380 381	[19]	408 409	a Portrature of the fyer at Jedo		江戸の火災	
De stad Saccay	388 389	[20]	418 419	The City Saccai		堺	
Brandende berg Sjurpurama	416 417	[21]	446 447	[no caption]		燃たぎる伊吹山麓	
Stad Cagoxuma	438 439	[22]	466 467	Cagoxuma		鹿児島	
Het uityryden van de gouverneur van Miaco	442 443	[23]	472 473	Gouernor of Miaco's Proyres		都の奉行の行列	
Vreugden-berg Pauromama	444 445	[24]	476 477	Pauromama or Mount of Pleasure		蓬萊山または快楽の山	
Inhaaling van de Hollandsche gesant tot Mia	448 449	[25]	478 479	The Reception of the Ambassadours		蘭使の迎接	

(次頁へ続く)

ドイツ語訳1669年			フランス語訳1680年		
	頁	No.	頁		
Ab Bildung der Reise	am 1Blatt.	[1]	Fol. 1	Route d'Osacca a Jedo	
Die Stadt Batavien	26 27	[2]	26 27	Plan de la Ville & du Chateau de Batavia	
Lose vor Nagesake	48 49	[3]	40 41	La Ville & le Chateau de Zelandia, situes dans l'ile de Taywan	台湾のゼーランドディアと城塞
Die Stadt Osacca	62 63	[4]	50 51	Magasin de la Compagnie dans l'ile Disma	出島の商館
Die Stadt Miako	72 73	[5]	62 63	La Ville d'Osacca	大阪
Mord des Keisers Kubo	72 73	[6]	70 71	Massacre de l'Empereur Kubo	
Die Stadt Jedo	104 105	[7]	72 73	La Ville de Miaco	
Goßenhaus mit 1000 Bildern	108 109	[8]	98 99	La Ville de Jedo	
Das Schlos zu Jedo	116 117	[9]	102 103	Temple ou il y a mille Idoles	
Das Schlos des Dairo zu Miako	130 131	[10]	110 111	Le Palais Imperial de Jedo	江戸の皇帝の宮殿[江戸城]
Das siedende Wasser Singock	232 233	[11]	120 121	Le Palais du Dayro a Miaco	
Dalbots Goßenhaus	240 241	[12]	98 199	Eaux bouillantes de Singoc	地獄の煮沸
Das Schloss Osacca	264 265	[13]	206 207	Temple de Dayboth	大仏の神殿
Goßenhaus ausserhalb Sackai	266 267	[14]	220 221	Chateau d'Osacca	大阪城
Des Keisers Reichsstul	344 345	[15]	222 223	Temple du Dayro	
Begrappnusse	348 349	[16]	24 25	Tremblement de Terre a Jedo	江戸の地震
Japanische Traugeprage	362 363	[17]	64 65	Trone de l'Empereur	皇帝の王座
Brand zu Jedo	368 369	[18]	68 69	Cimetière des Japonois	日本の墓地
Die Stadt Sackai	378 379	[19]	80 81	Ceremonies du Mariage	婚礼の儀式
Der brennende Berg Siurpurama	404 405	[20]	84 85	L'Embrasement de Jedo	江戸の大火
Die Stadt Kangoxuma	424 425	[21]	92 93	La Ville de Saccai	堺
Auszug des Stathalters zu Miako	430 431	[22]	112 113	Montagne de Siurpurama	
Freudenberg Pauroma	432 433	[23]	130 131	La Ville de Cagoxuma	鹿児島
Einhohlung der Geasanten zu Mia	436 437	[24]	134 135	Sortie pompeuse du Gouverneur de Miaco	都の総督の盛大な外出
		[25]	136 137	Pauromama, montgne agreable & charmante	
		[26]	138 139	Entree de l'Ambassadeur a Mia	

「上掲論文」でフォーラーは、「おそらくヨハネス・フィンケボーンズ (Johannes Vinkeboons, 1617-1670) の『密図』 (Geheime Atlas) と称された 116 枚の地図のうちの 1 枚を基にした銅版画ではないか」と推測している (フォーラー上掲示書 43 頁)。

この『密図』とは、フォーラーによるとアムステルダム の東インド会社付きのヨハン・ブラウが管理していた地図と眺望図が含まれている資料のことであるが、では、『出島図』をはじめとするモンタヌスの著書の随所で使用されている銅版画は、誰の手によって彫版されたのであろうか。

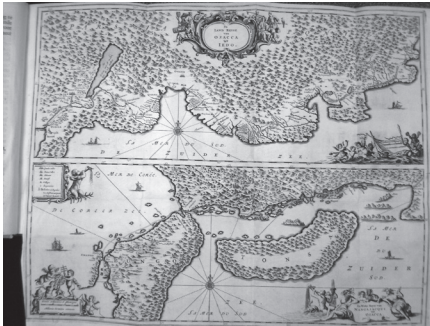
この点については、アンドルー・スタインメッツ (Steinmetz, Andrew 1816-1877) が 1859 年にラウトレッジ社から出版した『日本とその人々』 “Japan and her people, London, 1859” の脚注において (銅版画全体につ

いては詳細に述べていないが) タイトルページを一つの事例としてあげ、オランダ語初版などを出版したヤコブ・ヴァン・ムールス (Meurs, Jacob van 1619-1680) によって彫られたと指摘している。

ムールスは書籍商人であったが、また優れた彫版工でもあったらしく、彼は、モンタヌスの他の著書『未知の新世界、或は五大州の一つとしてのアメリカ大陸についての叙述』(1673年)の地図資料類についても銅版画で作品を残しているから、『本書』の銅版画、少なくともオランダ語初版のいくつかに関しては、モンタヌスの叙述に即しながら、ムールスが創意し、精励に自ずからの手で彫られたという想定は未だ推論の域を出ていない(このことはフォーラーが『出島図』については推定したように『密図』の中にムールスが彫版の際に参考にした元の資料が含まれていたかどうかについての確認は、彼が指摘するように『密図』のコレクション自体がハーグ国立古文書館、ヴァチカン図書館、パリ国立図書館などに分散されているために、現時点での確認は困難である)。

『本書』の英訳者で出版主でもあったジョン・オーグルビ (Ogilby, John 1600-1675) の友人に銅版画家のヴェンツェル・ホルル (Hollar, Wenzel 1607-1677) がいるので、英訳版ではホルルの係わりがどの程度あったのだろうかという点にも興味が湧き、銅版画が生まれた<背景>を探ることは課題として残る。

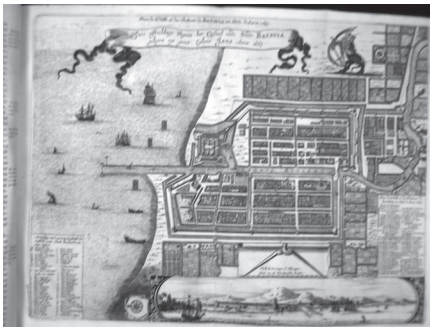
ここでオランダ語初版と英語訳初版を事例にして、これらの挿絵を紹介してみると、[1] 長崎大阪間海路・大阪江戸間陸路 [2] バタヴィア市 [3] 長崎前面の出島にあるオランダ人の住居 [4] 大阪 [5] 公方の殺害 [6] 都 [7] 江戸 [8] 千体の偶像のある寺 [9] 江戸の皇帝の宮廷(幕末期欧米人の日本研究で挿絵として頻繁に使用) [10] 都の内裏の宮廷 [11] 地獄の沸湯 [12] 大仏の寺 [13] 大阪城 [14] 堺郊外の寺 [15] 江戸の地震 [16] 皇帝の玉座 [17] 墓地 [18] 日本の結婚の儀式 [19] 江戸の大火(明暦3年の江戸大火) [20] 堺 [21] 炎上する息吹山麓 [22] 鹿児島 [23] 都の総督(奉行)の外出 [24] 歓喜に満ち溢れた蓬莱山 [25] 宮でのオランダ使節の迎接(「宮」は、東海道有数の宿場町で、熱田宿、宮の宿とも言われ、三重県桑名へ向かう「七里の渡し」の渡船場であつた)である。



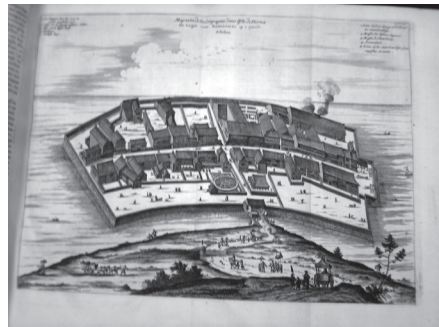
1. 地図（この地図にはCoriir Siiの名称がある）



1. 朝鮮海



2. バタビア



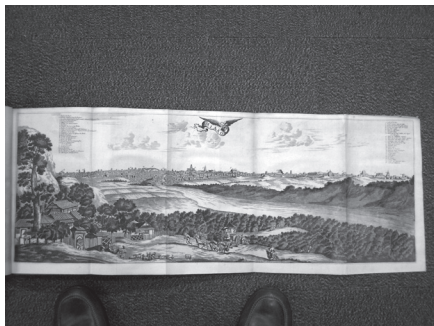
3. 出島



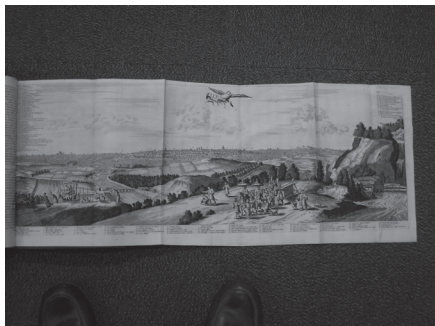
4. 大阪



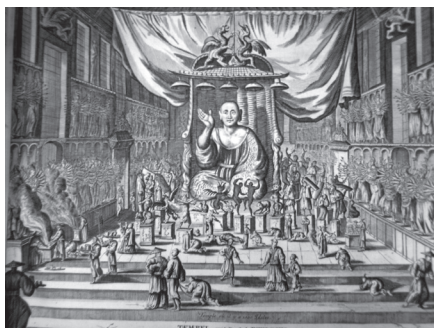
5. 公方の殺害



6. 都



7. 江戸



8. 千体の偶像のある寺



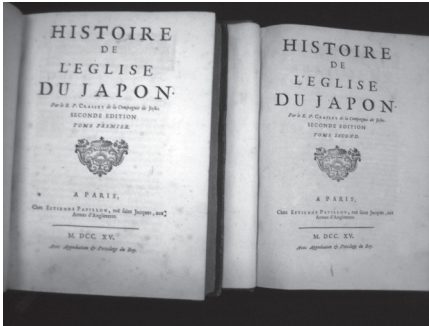
9. 江戸の皇帝の宮廷



10. 都の内裏の宮廷



11. 地獄の沸騰



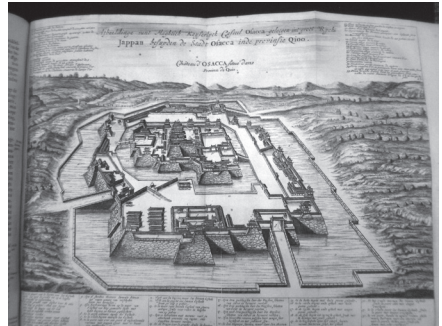
11. クラッセ『日本教会史』



11. 西洋教会史の地獄の沸騰



12. 大仏の寺



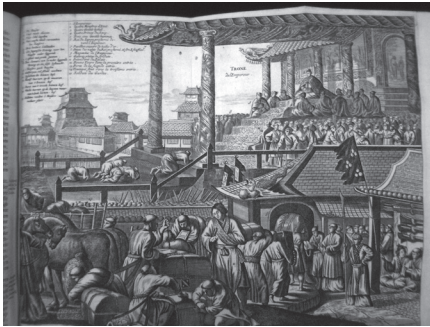
13. 大阪城



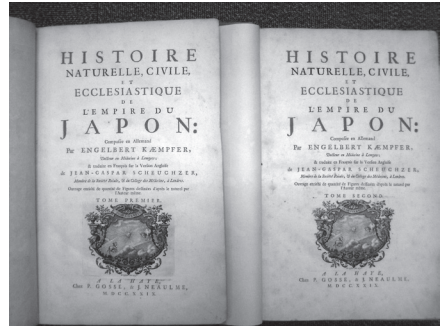
14. 境郊外の大邸宅



15. 江戸の地震



16. 皇帝の玉座



16. ケンペルの『日本誌』フランス語訳



17. 墓地



18. 日本の結婚の儀式



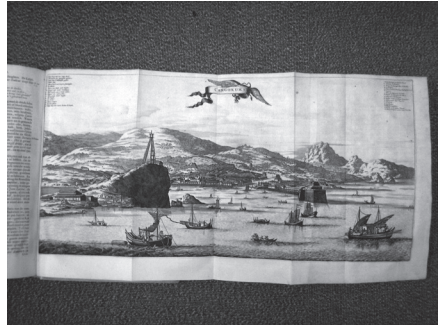
19. 明暦3年の江戸大火



20. 堀



21. 炎上する息吹山麓



22. 鹿児島



23. 都の総督（奉行）の外出



24. 歓喜に満ち溢れた蓬莱山



25. 宮でのオランダ使節の迎接

これら折込まれた25枚の挿絵の中で、[1] の長崎から大阪、大阪から江戸に至る絵地図には、日本全国の地名が認められるが、小田原OdauroまたはOdaura、箱根Faccone、平塚Fraski、藤沢Fovissauwa、鎌倉Camacura、

戸塚TasakaまたはToska、保土ヶ谷Fundaga、神奈川CammagawaまたはCammagowa、川崎Cawasacca、品川Sinagawa、江戸IEDO名称も刻版されている。このことは、1669年に神奈川の地名ほか東海道の沿路の名称がモンタヌスの著書を通じてヨーロッパ人の目に触れたことになる。

[3]は『出島』図で、ヨーロッパ人が表現したものでは一番古いとこれまで指摘されてきており、先の「上掲論文」でフォーラー「おそらくヨハネス・フィンケボーンズ (Johannes Vinkeboons 1617-1670) の『密図』(Geheime Atlas) と称された116枚の地図のうちの1枚を基にした銅版画ではないか」と推測している。(フォーラー上掲示書43頁)

[11]は、1625年(寛永2)の島原の乱における『雲仙岳の迫害図』である。噴火口に投げ込まれる者、逆さ吊りにされ熱湯を浴びせられる者、火あぶりにされる者、海に沈められる者、竹鋸で首を挽き落とされる者など、阿鼻叫喚の世界を史実に基づいて表現している。後に、ジャン・クラッセ (Crasset, Jean 1618-1692) の『日本教会史』"Histoire de l'Eglise du Japon" (初版は1689年、本学所蔵は第2版の1715年) などの《日本におけるキリシタン迫害の歴史に関する諸研究》に影響を与えた。

尚、島田孝右は、モンタヌス『日本誌』英語版、別冊解題目・索引(柏書房 2004年28頁)で「吉田氏が指摘しているように、ジャン・クラッセ (Jean Crasset) の『日本教会史』(1689) に収載されている『雲仙地獄』の挿絵は『日本誌』からとられたもの」(吉田隆「横浜の文献資料を読む(講演記録)『横浜の学び方・歩き方』横浜市連絡会議 2002年)と述べている。

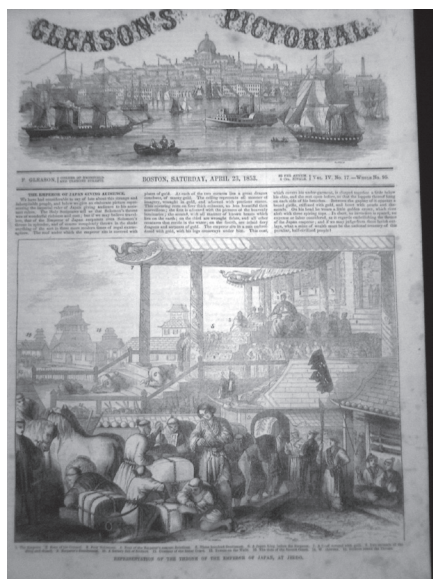
ここで、本稿166頁の「……モンタヌスが、想像し紹介していたのとはずっと違っていた。……」とケンペルが述べていることに戻ると、確かに彼が実地見聞し『日本誌』の挿絵の謁見の広間は、モンタヌスの[16]の「皇帝の玉座」(オランダ語初版356・357頁、英語訳初版384・385頁)それとは明らかに異なっている。ところが、モンタヌスの『オランダ東インド会社遣日使節紀行』から180年以上、ケンペルの『日本誌』から100年以上経過してこの「皇帝の玉座」は、日本を理解する上での再び重要な情報源となるのである。

周知のようにペリー提督指揮下のアメリカ合衆国日本遠征東インド艦隊の

4隻が浦賀沖に現れたのは1853年(嘉永6年)7月8日であるが、日本来航前にアメリカのボストンで発行されていた米国最初の絵入週刊ニュース雑誌『グリーソンズ・ピクトリアル』GLEASON'S PICTORIALの4月23日号には、The Empror of Japan Giving Audiencer「謁見の場での日本の皇帝」の記事が第一面を飾っているからである。

記者は、この挿絵がモンタヌスから彫版されたと明記していないから、ボストン市民はモンタヌスのことを知らなかったと思われる。

しかし、ペリーらは来日に備えて、ケンペルの著書、そしてシーボルトの『Nippon』を当時の金額503ドルで購入して日本の情報収集をしていたから、彼らの著書を通じてモンタヌスを知っていたと推測はできる。(加藤、上掲書 33頁)



Gleason's Pictorial 1953 (April, 23)

『グリーソン・ピクトリアル』は、1852年以来、日本について特集記事を掲載していた。『1852年5月15日号』では、神武天皇による日本帝国の建国が紀元前655年頃で、この時から日本の年代記が内裏と公方という二重支配のもと

で歴史的、政治的に始まっていることに特色があると指摘している。江戸、都、大阪、長崎について、日本の自然、村落、山、湖、河川などについて、絹織物製品や綿織物製品は中国よりも優れていて上質であると説明がされている。ここからペリー等の日本来航は十分な情報収集のもとで行われていたことが理解できる。

また、ここで重要なのは、紙上では、合衆国が日本を蛮人の国ではなくて“half-civilized people”（半ば文明化された）国であると認識していたことである。

挿図に表現されている当時の日本人の外見、その衣装（左合わせ）、自然の風景、寺院、建築物などは、当時のヨーロッパの人々の空想の域を出ず、極めて奇異に見えるかもしれない。しかし、歴史的時間と空間は300年以上経過している。現今の我々日本人の眼には極めて斬新にも写るが「図像学」的な究明も求められるのではないだろうか。

アンペール『幕末日本図絵』とアンペールコレクションについてHumbert, Aimé, 1819-1900. *Le Japon illustré* / par Aime Humbert.-- Paris : Librairie de la Hachette et Cie, 1870.-- 2 v. 36 cm.

著者エメ・アンペールは1819年6月29日にスイス北西部、ジュラ山脈の麓のフランス国境近くに位置し、スイスの時計産業の発展の中心を担ってきたラ・ショー・ド・フオンのビュルルに生まれ、1900年9月19日にレマン湖北側のヌーシャテルで死亡。

初等教育の終了後、ローザンヌのアカデミーで、史学、ギリシャ語、ギリシャ文学、宗教学などを学んだ。その後、1835年ドイツのヴェルテンベルグの寄宿学校でフランス語の教鞭をとったが、1839年にチュービンゲン大学に入学した。チュービンゲンでは言語学、哲学、一般文学を修めたが中退し、モルジュの高等学校で中級ラテン語の講師になった。当時のヨーロッパ全体は、1830年のフランス七月革命の影響を受けて自由主義の潮流が大きく動き出した時代状況下であったから、スイスもプロテスタントのカントン（邦）とカトリックのカントン（邦）との対立がこれまで以上に現れていた。1845年ヴォーのカ

ントンで革命が勃発し、1846年8月に教職を辞めたアンベールは、1848年3月3日、臨時政府の委員に任命され、17日にモーチェ Motieres及びラ・ショー・ド・フォンのカントン（邦）より選挙された憲法議会の一員となり、5月4日、邦内閣の文部長官になった。1857年にシャン・ド・フォンとル・ロクルの時計生産者組合「ユニオン・オルロジェール」Union Horlogereの会長になった彼は、1858年にラ・ショー・フォンに事務所を設けてザンクトガレンの商業指導局と業務提携を行った。時計業界の貿易上の行き詰まりとアジア向け貿易を考えていたザンクトガレンの木綿工業界（両工業とも宗教改革期の16世紀～17世紀に、フランスからスイスに逃れた新教徒ユグノーや、スイス盟約者団13カントンの共同支配地だったロカルノから逃れた改革派の信仰の亡命者のCapitelnei・有力者ファミリーや手工業者の新技术の影響に負っているが）との思惑が一致したことで、両業界は、スイス連邦政府に日本との修好通商条約の締結に向けて日本派遣を商業指導局を通じて促した。

シンガポールにアジア向け商館を設置していた「時計生産者組合」は、組合の輸出部門のアジア局総支配人であるプロイセンのルドルフ・リンダウ（Lindau, Rudolf 1830-1910）を日本に向けて1859年4月、日本に派遣していた。

リンダウの肩書きはスイス連邦使節で、アンベールのようにスイス連邦の代表として日本と和親・通商条約の交渉を行い、批准の用意をもとにこれを締結する任務を与えられたスイス連邦全権公使ではなかった。彼は通商関税局の代表でしかなかったのである。

1859年（安政6）9月3日に、リンダウは、長崎に到着し、10月中旬に神奈川に移り、横浜の運上所で2回にわたって幕府との交渉を行った。しかし、彼の交渉は失敗に終わり、1860年1月に日本を去った。

後にリンダウは再度来日し初代のスイス連邦駐日領事となり、著書Un voyage autour du Japon. Paris: L. Hachette, 1864.を著し、「日本の親切な持てなしが私に残してくれた思い出は、横浜や長崎で生活してきたヨーロッパ人のだれをも驚かすことはないであろう。彼らのうち何人かは、この日本でこれと似た歓迎を受けてきているからである。日本の庶民は実際に外国人が好きである」「彼らは外国人の優れた面を否定」しないと述べ、日本人の人間性に

深い共感を持った。この〈共感〉は、多少の差異はあれ、幕末期前後に来日した欧米人に共通している（ルドルフ・リンダウ著森本英夫訳『スイス領事の見た幕末日本』新人物往来社、1986年206頁）。

1861年（文久1）1月にプロイセンが日本との修好通商条約を締結すると、スイスも日本との修好通商条約締結の使節を送る機運が高まった。

1861年7月、使節派遣費用の予算が決定すると、1862年5月、スイス連邦議会はアンベールを遣日使節団長に任命した。

アンベールは、スイスが日本との和親条約を締結していなかったために、日本と親密なオランダ国の国籍を取得することで代表資格の地位を得た。

また彼をはじめとして代表団は誰一人日本語を話せなかったから、当時の日本が外国人との〈コミュニケーション〉に使用していたオランダ語の習得にアンベールは励み、来日に備えた。

1863年（文久3）4月9日に長崎に到着した代表団は、オランダ政府の軍艦で横浜に向かった。

彼が来日した当時は、日本は激動の時代であった。

締結へ至る道は平易ではなかったがスイスの公使館全員はオランダ公使館の所在地であった長応寺（麻布周辺、芝伊皿子に在ったが、明治35年に寺が北海道に移転したために現存しない）に居住しながら江戸の周辺を散策して過ごした。

幕府との交渉はオランダの仲介と後押しでようやく1864年（元治1）2月6日に調印され、スイス連邦政府の総領事館を総善寺に置いた。これが、日本がペリーの来航後に結んだ修好通商条約の8番目にあたる日瑞修好通商条約である。

当時、幕府は日本に来訪した欧米人が日本国内を自由に歩きまわれる地域を、1858年（安政5）の日米修好通商条約をはじめとする欧米諸国との通商条約に基づき制限していた。すなわち、横浜・箱館・神戸・長崎・新潟の開港場5港とその周辺の遊歩区域内であって、彼らは幕府の役人の監視下にあったのである。



江戸の町を散策するアンペール一行

アンペールは、捗らない交渉の合間に、その余った時間を日本の国と民衆の研究に注いだ。この約10ヶ月間の日本滞在中に、日本関係資料を集め、帰国後、集めた資料をもとに『世界旅行』誌 *Le Tour de Monde* (1866-69) に連載したが、後に本書をフランスで出版した。

本書には、彼の目に映る日本の景色や日本の社会の物事、その有様、日々の出来事などを豊富な挿絵を使って見聞したことを書き記されている。挿絵には、アンペール自身が墨でスケッチした作品、彼の目の前で撮られた写真、彼が頻繁に通った店で購入した写真、それを基にして描かれたもの、彫版、彩色画などが含まれている。

日本の冠婚葬祭や切腹（腹切り）など日本固有の慣習については、十分には、スイスはもとより欧米に十分に紹介されていなかったから十分関心がもたれた。

日本の自然や歴史、政治制度、建造物について、宗教、儀礼、社会の様子、風俗、習慣、慣習、日本の諸工業、長崎、下関、京都、江戸、横浜など、日本の諸地域の風景やそこに住む庶民生活の様子などが豊富な挿絵によって紹介され明らかにされたことは、かつてなかった。

日本の文化とスイス・ヨーロッパの文化との相違、そして「スイスの風光だけが、日本のこの美しい自然と比較できるのではないかと思った」（高橋上巻27頁以下）とアンペールは述べる。

日本の自然の風景とスイスとの類似をみとめながらも、日本の文化の固有性を指摘する。

彼が指摘したその一事例を挙げるならば、日本の言語の「楷書体」、「行書体」、「草書体」などの文体に「言葉自身にも階級ある」（高橋下巻33頁以下）と捉えていく姿勢である。

当時、日本を訪れた欧米人がそうであったように、比較文化論的なく方法>が認められる。彼は、これによって、ケンペル、ツェンペリ、ティチング、シーボルトらが紹介してきた<日本の文化の形>その<有様>を先達の成果をふまえて集約的に広く世界に、そして、これまで以上に日本の庶民の生活からみた文化にも光をあてる。

アンペールの本書のタイトルページに記述があるように、挿絵はE.パヤール、L.クレボン、H.クレボン、H.クレルージュ、A.ド・ヌービル等が描いている。彼のこの著書についての紹介については、フランス語初版全訳『幕末日本図絵』（雄松堂書店昭和45年全2巻、以下高橋）またロシア語初版抄訳『絵で見る幕末日本』（講談社学術文庫2004年、以下重森）での高橋邦太郎、重森唯士両氏の解説や八木正自「Bibliotheca Japonica XXII アンペール著『日本図絵』の成立とその周辺」（『日本古書通信』古書通信社1999年第843号25頁、以下八木）で知ることができる。

また先のリンダウの著書の「はしがき」で富田仁は、パリの国立図書館で1859年の横浜開港以後にフランス語で執筆された日本見聞記を調べていた。

それはなぜか。「ジュール・ヴェルヌ (Verne, Jules 1828-1905) が『80日間世界一周』で横浜を描いているが、その参考文献を調べるごとが目的であった。結果としてエメ・アンペールの著作を利用していたことをつきとめた」（森本13頁）と。ここから『幕末日本図絵』が世界文学にも影響を与えていることが理解できる（ヴェルヌの作品は明治時代に多く訳されていて、日本で最初の翻訳は川島忠之助訳『新説八十日間世界一周』（丸屋善七店明治11-13年）である）。

本書の初版は日本では16館所蔵であるが個人所蔵も想定するならば多少の異動もありだろうし、海外の所蔵館は41館だから内外で57館から60館だろうか、同年に出版されたロシア語訳は神奈川大学図書館と個人所蔵、海外ではウイコンシン大学図書館所蔵が所蔵しているが今のところ10館に満たないのでもないだろうか。

重森唯士は、ロシアの文豪チェーホフが好んで散歩した古い町であるクズネツキー・モストの古本店でロシア語訳を入手した際に、レーニン国立図書館では所蔵してないことを確認したうえで「アンペールのこの露文原書が世界一を誇るレーニン図書館にあるかどうか調べてみたことがある。だがついに同書は見当たらなかった。…世界でたった一冊残って珍書を掘り出したものかもしれない」と述べていることからロシア語訳も稀少であることは推測できるだろう。

また1874年に出版された英語訳の初版Japan and the Japanese Illustrated. Tr. By Mrs. Cashel Hoey; and ed. By H.W. Bates.--London: Richard Bently & Son, 1874.-- Spine title: Manners and costumes of Japanも抄訳であるが、国内4館、海外50館だから60館前後ではないだろうか。本書の表題が示すように、当時の日本を豊富な挿絵（含む地図資料）で欧米に紹介していることがこの著書を特色づけている。

キャプションが付与された挿絵は調べられる範囲では、フランス語初版の第1巻には235点、第2巻は230点、ロシア語訳には135点、英語訳には210点の挿絵が掲載されている。それぞれの初版にはキャプションのない挿絵が含まれているので挿絵の総数は多少の異動が生じると思われる。

先の高橋は「解説」のなかで1931年（昭和6）にマルセイユのガリバルディ街の古書店に並べられていた資料の中から古書目録を入手したところ、その目録の裏面全頁にアンペール所蔵の日本美術書を一括で売るという記載があったことに触れており、またそれらが「何人の手に落ちたか知る由もないことである」（高橋2頁以下）と述べている。

アンペールの10ヶ月の滞在中に高橋の指摘した日本の美術資料の他にどれほどの日本学に関わる資料を収集してスイスに持ち帰ったのか。『本書』の序文でアンペールが述べているように、墨で描いた写生、色刷りの版画、風景画、目の前で撮影した写真などを収集したことは分かるのだが、そのコレクションの全貌はこれまで十分に明らかにされずにきたのである。

修好通商条約が締結されたのは1864年であるから2004年は日瑞修好通商条約140周年だった。それを記念して日本・スイス交流140周年記念シンポジウム「幕末・明治期の日瑞交流をめぐって」が日本女子大学国際交流センターを

会場にして行われた。

そのシンポジウムで、チューリヒ大学民俗博物館のフィリップ・ダレは「ホルナー、アンベール、その後 ―人類学的観点から見たスイス人の日本像―」Philippe Dallais. Horner, Humbert and Thereafter: The Swiss Image of Japan in Anthropological Perspective, 2004.でアンベールの持ち帰ったコレクションについて述べている（カスパー・ホルナーは、江戸後期にロシアの遣日使節レザノフと共に日本を訪れたスイス人科学者で、彼のコレクションの100点余りのうち日本関係の絵は20点で水彩画が多いが、このホルナーのコレクションもアイヌ研究家でもあるダレがチューリヒ大学附属民俗学博物館の倉庫の片隅から発見した）。

ダレが整理しているチューリヒ大学民族博物館のアンベールのコレクションは3000点を超えており、横浜やその周辺で収集した印刷物、デッサンおよび写真などを含まれている。さらに、このコレクションには100点を超えるフェリックス・ベアト（Felix Beato 1834-1908）の極上の「写真」やチャールズ・ワグマン（Charles Wirgman 1834-1891）の「デッサン」、「浮世絵」ではないが日本の「木版画」などが含まれている。

「浮世絵」がコレクションに含まれていなかった点については、アンベールが、『本書』で「浮世絵」について「この類の作品は、ただむずかしいものをやり上げたという空しい美しさ以外には、人をひきつけるものは何もない」（高橋、下巻97頁）と述べているから、アンベールの興味をそれほど惹かなかったのであろうか。

アンベールは、これら3000点を超える（3600点ほど）コレクションの様々な資料を加工し本書の叙述を進める上で必要な挿絵として挿絵に用いたという先学の指摘の正しさが理解でき、また推測の域をでしかなかった指摘についても再度考える機会を筆者に与えたのである（2012年に筆者は当時ヌシャテルにいたダレの下でアンベールコレクションを調べたが確かにワグマンの貴重なスケッチ画やベアトの写真と比べると浮世絵類は少なかった）。

浮世絵について「この類の作品は、ただむずかしいものをやり上げたという空しい美しさ以外には、人をひきつけるものは何もない」（高橋、下巻97頁）と述べているから、アンベールの興味をそれほど惹かなかったようである。

アンベールは、これら3000点を超えるコレクションの様々な資料を加工し本書の叙述を進める上で必要な挿絵として挿絵に用いたという先学の指摘は正しいといえる。

【コラム：ベアトとワーグマン】

1863年（文久3）の春頃来日し日下部金兵衛らの横浜写真の写真家たちを育てたイタリア系イギリス人の写真家ベアト（Felice Beato, 1832-1909）と1861年（文久1）に来日し幕末期の日本、神奈川、横浜を取材して見事なスケッチと記事を書き、また五姓田義松（1855-1915）、高橋由一（1828-1894）らの明治初期を代表する洋画家を育てたイギリス人で『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』The Illustrated London News（以下『ロンドン・ニュース』）の特派員ワーグマン（Charles Wirgman, 1832-1891）とは親密な関係であったことは、すでに斎藤多喜夫「横浜写真史 F. ベアトと下岡蓮杖を中心に」（横浜開港資料館編『フリックス・ベアト写真集 幕末日本の風景と人々』明石書店1987年169頁以下）で「両者は商法上正規のパートナーシップを結んでいたと考えてよい。ベアトのアルバムのなかにワーグマンの絵を複写したものが含まれていたり、ベアトの写真がワーグマンの手を経てロンドンニュースに送られたであろうことなどに、両者の協力関係が窺われる」（同書、177頁以下）と指摘しているからである。

ワーグマンによって本国イギリスに送られた写真は、まだ写真製版技法の発明がなされていなかったから（1880年代にこの技法が発明されたが、挿絵に替えて全面的に写真になるには1910年代まで待たねばならなかった。これについては、Donald Edward(ed.) : Photos and Captions: The Political Uses of Photography in the Third French Republic, 1871-1914. Ann Arbor, Michigan, UMI Dissertation Services, 2002. P. 5. Reprint of the author's thesis(Ph.D.)—Univ. of Washington, 1981.が詳しい）八木が「欧米の新聞図版は殆ど木口木版画図にたよっていました。木の板目でなく、堅い木口に彫刻し、線画として濃淡を表現」していたと指摘するように、それらは本国イギリスの木版工に委ねられたのである。



ヌシャテル「民族誌博物館」



展示1



フィリップ・ダレ氏



展示2 会場全景



展示3



展示4

「日本を想う Imagine Japan」展

幕末期前後の欧米人の『日本研究』にみる日本人のイメージ

いくつかの「断片」から欧米人の日本体験を捉えてみよう。

「私はツェルマット、アオスタそしてコモからのモンテローザを見たことがある。またユングフラウの人をよせつけない野性美やマッターホルンの断崖絶壁の頂上を賛美したことがある。だがしかし富士山[フジヤマ]、その形状の純然で堂々たる偉観、荘厳なる美しさをこれまで決して見たことがない」と『日本—その建築、美術および美術工芸』Japan:its Art Manufacture, London:Longmont Green, 1882の著者ドレッサー (Christopher Dresser, 1834-1904) は述べている。

ドレッサーは、19世紀後半から20世紀初頭にかけて活躍した装飾デザイナーでヨーロッパでは草分け的存在である。

スコットランドのグラスゴー生まれの彼は、ロンドンのデザインスクールで学んだあと植物学の研究に進む。

ドレッサーが乗船した船が横浜に投錨したのは1876年(明治9)で、船上で誰かが「あつ、富士山だ」大声で叫んだようで、彼はこの著書で12月26日朝6時30分「私は初めて日本を見る」と述べ日本の象徴として「富士山」を捉えていた。

幕末期、1853年(嘉永6)、1854年(安政元年)の2回に涉るペリーの来航を境にして、以前よりも増して日本を訪れた欧米人たちが一様に富士山に初めて出会い、ドレッサーと同様な感動に駆られて日本の表象として「富士山」を捉えたことは想像に難くないし、また彼らの日本研究からも知ることができる。1690年(元禄3)から2年間長崎出島のオランダ商館医官で博物学者でもあったエンゲルベルト・ケンペル (Engelbert Kaempher, 1651-1716) も著書『日本誌』The history of Japan, Together with a Description of the Kingdom of Siam, London: printed for the Translator, 1727. の1779年『ドイツ語訳』で「その姿は円錐形で左右の形が等しく、堂々としていて草や木は全く生えていないが、世界中で一番美しい山と言うのは当然である。…日本の詩人や画家がこの山の美しさをいくら褒めたたえ、うまく描いても、それで十分ということはない」(斎藤信訳ケンペル著『江戸参府旅行日記』平凡社1977年158頁以

下を参照。尚、この斎藤訳の抄訳は1964年覆刻版を底本にしている）と述べている。

このように幕末期から今日にいたるまで日本の表象として富士山は捉えられているといえる。

おわりに

イギリスの海軍少将で著述家でもあったシェラード・オズボーン (Sherard Osborn, 1822-1875) は1822年4月5日インド東海岸のマドラスで生まれた。彼の父も軍人でマドラス軍の連隊長であった。

1837年にオズボーンは海軍に入隊し、1857年から1859年にかけて中国、日本に渡航している。彼は、江戸滞在中に浮世絵などを蒐集し、蒐集した作品を著書『日本断章』Japanese Fragments ; with facsimiles of illustration by artists of Yedo, London:Bradbury and Evans, 1861の挿絵に使用している。

全8章からなる本書8章」で日本の歴史、政治と政治構造、文化などに鋭い洞察を行っている。最後は、拙訳であるが、以下のような断片で終わりたい。

「日本国家の最大の秘密は、そしてつまるところ、支配の構造が優れている国家はみなそうなのだが、巷の隅々の情報を完全に掌握し占有することを完璧に維持するために、ほかの世界でこれまで見られない最も並外れた相互責任制度に基づく報告制度を作り上げたことにある。誰もが善い振る舞いを行う責任があり、誰もが法に対して従順でなければならない。誰もが隣人の行為を書き留め、また書き留められる、謂わば相互監視システムが出来ている」(Osborn, p.22) と、幕府の政治・支配構造の根幹的側面を捉えている。

この分析は、「開国」を著した丸山眞男は、幕藩体制が「諸藩間のコミュニケーションは幕府によって制限されただけでなく、諸藩自らもそれぞれ固有の武装権と行政権をもって嚴重に自己の閉鎖性と自足性を維持しようとした。幕末に來た外国公使はほとんど一様にこの体制下における密偵と相互監視機構の異常な完璧さ」(『丸山眞男集第8巻』岩波書店1996年50頁以下) によって支えられていたことに驚嘆したのであると指摘しているが、この点はオズボーンの分析と連鎖していると捉えることができる。

参考文献

- アルノルドゥス・モンターヌス著和田万吉訳『モンタヌス日本誌』（丙午出版社、1925年）
- エメ・アンベール著藤森唯士訳『絵で見る幕末日本』（講談社、2004年）
- エネ・アンベール著高橋邦太郎訳『続・絵で見る幕末日本』（講談社、2006年）
- 加藤雄三著『黒船異変』（岩波書店、1993年）
- 金井圓著『江戸西洋事情』（新人物往来社、1988年）
- 神川大学図書館編『古典逍遥』（神奈川大学図書館、1986年）
- ケンペル著斎藤信訳『江戸参府旅行日記』（平凡社、1977年）
- 斎藤多喜夫「横浜写真史F.ベアトと下岡蓮杖を中心に」（横浜開港資料館編『フリックス・ベアト写真集 幕末日本の風景と人々』明石書店、1987年）
- 島田孝右編『モンタヌス日本誌英語版別冊解題・索引』（柏書房、2004年）
- 高津秀之「イメージの力ー近世ヨーロッパの図像史料をめぐる一考察」（『史潮』新75号、2014年）
- 富田仁編『事典外国人が見た日本』（日本アソシエーツ1985年）
- 中川久秀「一八世紀フランス『百科全書』の日本観察（上）（下）」（『思想』1975年、No.608、No.609）
- マーティ・フォーラ、フォーラー・くに子訳「われらの出島ーオランダ人による歴史的考」神奈川大学工学部建築学科建築史研究室編『出島オランダ商館復元をめざして』（史跡「出島和蘭商館跡」建造物復元検討委員会、1999年）
- 『日本を想う Imagine Japan』（Musée d'ethnographie Neuchâtel 1914）
- 丸山眞男「開国」（『丸山眞男集第8巻』岩波書店、1996年）
- 森田安一編『日本とスイスの交流 幕末から明治へ』（山川出版社、2005年）
- ライナー H. ヘセーリンク「カルヴァン主義思想家、アルノルドゥス モンターヌスとその業績」（有坂隆道編『日本洋学史の研究X』創元社、1991年）
- ルドルフ・リンダウ著森本英夫訳『スイス領事の見た幕末日本』（新人物往来社、1986年）
- The Empror of Japan Giving Audiencer in *Gleason's Pictorial* 1953 (April,

23)

Reiner H. Hesselink, Memorable Embassies The secret history of
Arnordus Montanuss' Gedenkswaerdige Gesantschappen in *Quaerendo*,
32/1-2 (202)

Max Sander, Hand buch der Inkunabelpreise, Mailand:Ulrico Hoepli,
1930